

PRRS発症を拡げない、早く終息させる方法

PRRSが母豚群で発症すると分娩舎を介して子豚へウイルスが伝播し、著しい生産性の問題を引き起こし、あげくは離乳以降のウイルスの常在化を招きます。そうならないように分娩舎で感染した弱小の豚を徹底的に排除する方法がマクレベル(McREBEL=Management change to reduce Exposure of Bacteria to Eliminate Losses)という方法です。しかしこの方法では感染を広げないことが最大のテーマなので管理が全般に厳しすぎるきらいがありました。そこで実際的な内容に載せ替えて適度なアレンジを加えたことから今でも活用される方法となっています(修正型のMcREBEL)。PRRSの撲滅プログラムが地域レベルで進められているアメリカでも依然として発症時の有効策として利用されています。

1. **生まれた子豚は少なくとも6-8時間、本来の母豚の初乳を飲ませる。**
 - 産んだ母親からしか提供されない、親子の契りのようなリンパ球免疫セットは初乳からしか与えられません。これを十分飲ませないと病気で死んでしまいます。分娩後数時間という不可能と思いがちですが、夜中に分娩しないように分娩を昼間に集中させる方法を採用すれば良いのです。優秀な管理者が付きっきりで分娩介護をするという状況も可能です。
2. **里子は生後 48 時間以内に行う(PRRS 陽性子豚は 24 時間以内)。ただし同時期分娩の母豚に限定する。**
 - 里子とは母豚の異常時に別の親に移して授乳させることですが、まずは適正な初乳を十分飲んだことが確認できれば時間限定で可能です。相手先は同じ日に生んだ母豚が最も適しており手際よく出来るだけ早く里子をします。里子に出る豚も残る豚も大変な試練です。24 時間以降に里子せざるを得ない状況が発生した時は、むしろ早期離乳させてしまった方が結果的にはよいかもかもしれません(代用乳やミルクイーウィーンフィーダーを有効に活用)。
3. **乳頭数に問題がなく一腹 10-13 頭であれば無理に里子しない。**
 - 乳頭は使わなければ発達しません。乳頭数の分だけ子豚がついていることが理想です。事情があって里子をするのですから、何もなければ無理に里子はしません。
4. **子豚のスワッピング(入れ替え)は厳禁。虚弱豚や活力の弱い豚は別の方法で救済する。**
 - 子豚の数やサイズをそろえるために里子するという考えは間違いです。子豚の発育においてマイナス効果しか生みません。
 - 一般に同じ大きさの子豚であれば里子をしない方が子豚はしっかりと大きく育ちます。
5. **たとえ何があっても母豚や子豚を別の部屋に移動しない。**
 - 部屋単位の母豚の移動、ましてや子豚を別の部屋に移動するのはもってのほかです。部屋によってウイルスの有無があるからです。人為的に感染伝播を助長することは決してしてはいけません。
6. **厳格な AIAO ポリシーで管理する。**
 - 分娩舎導入豚の洗浄消毒、管理者の豚房ごとの手の洗浄消毒や手袋の装着、使った道具類をそのまま使わないなど基本は厳しく踏襲します。
7. **分娩クレートの中に不用意に足を踏み入れない。例外は離乳日だけ。**
 - 下痢など直接PRRSと関係があるかどうかともわからない場合でも、豚房にむやみに足を踏み入れないようにします。感染がある豚房とない豚房が存在するかもしれないと考えると理解しやすいでしょう。

8. 子豚処置や里子の移動に同じカートを使用しない。子豚は腹単位、個体ごとに丁寧に扱う。
 - 感染を不用意に広げないことが原点ですので、カート子豚の扱いなども慎重に行います。
9. 保温箱は腹ごとに洗浄消毒しておく。
 - 保温箱だけでなく、床面も柵も分娩前にはきれいに洗浄消毒しておきましょう。
10. 子豚の注射針は腹ごとに換える。子豚の注射の際は腹ごとに注射針を変える。
 - 注射針の変更もかなり一般的に普及した概念のようです(アメリカ、EU諸国)。実際にはなかなか面倒だという感覚もありますが、慣れることしかありません。
11. 母豚(雄豚)の注射針は個体ごとに換える。
 - 農場に数千頭も母豚がいる訳ですから大変な針の管理です。針も再生するのが基本と考えれば不可能ではないでしょう(理想の追求も大事です)。
12. 子豚の処置に使う器具類:メスや断尾器は2セットずつ用意し、腹ごとに取り換え、消毒液につけ置きする(部屋間移動可)。
13. 子豚処理の際は必ず手袋をし、腹ごとに交換する。PRRS 陽性の子豚は特に注意する。
14. 入墨器は使用後、腹ごとに消毒液につけ置きして再使用する。
15. 回復の見込みがない豚は速やかに殺処分する。離乳時まで生かさない。
 - 回復の見込みがあるかどうかの瞬時の判断が大事です。動物愛護的にも受け入れられています。
16. 離乳前後で通路はよく洗浄消毒する。妊娠母豚への馴致はしない。
 - 分娩舎の通路だけでなく、導入する母豚も洗浄します。
 - 糞便の馴致は育成期に済ませ、基本的には妊娠期には行わない方が良いでしょう。特に PRRS の陽性農場では禁忌です。この場合の馴致はあくまでも大腸菌などの下痢に対するものですから、PRRS の免疫賦与とは違いますので分けて考えましょう。

ポイント及びまとめ: 本来の母豚の初乳をしっかり飲ませます。免疫適合性などが理由です。里子は時間制限があります。やむを得ない場合以外はできるだけ行わないようにします。設備器具や道具の徹底消毒、手袋や長靴の洗浄も基本です。PRRS農場での注射針の交換は意外に効果的なことが実証されています。PRRSに限らず感染初期の血液には菌が含まれているからです。状態が落ち着いている時はそれほど厳格にする必要はないかもしれません。

PRRS感染の間只中では、何をしても無駄なことがあります。バイオセキュリティをおろそかにしていると収拾がつかなくなる恐れがあるので、常に菌の拡散をできるだけ抑えるために必要だと解釈しましょう。実施にあたっては獣医師とよく相談の上、行う必要があります。